

Khachaturian: SABRE DANCE

DIGITAL 45

RUNDFUNK BLASORCHESTER LEIPZIG, DDR.

Cond. Klaus Wiese



- A) 1. Khachaturian: Sabre dance 剣の舞 2'22"
 2. Kabalevsky: Gallop-The comedians 道化師よりギャロップ 1'34"
 3. Groeling: Muss i denn ムシデン(別れ) 1'03"
 4. Greenaway-Cooke: Ein Musikant zieht durch das Land 口笛天国 2'23"
 5. Stijl: Fidele Gesellen 陽気な若者 2'50"
 6. Kosaku Yamada: Aka-Tombo 赤とんぼ 3'05"

- B) 1. C. Reichelt: Die Fanfare Von DAM DAMのファンファーレ 0'33"
 2. Suppe: Light cavalry overture 軽騎兵序曲 6'32"
 3. J. Strauss: Radetzky March ラデツキー行進曲 2'11"
 4. Herzer: Hoch Heidecksburg ハイデックスブルク万歳 3'55"
 5. Sousa: The Washington Post March ワシントン・ポスト 2'14"

Title for Recording (27th August, 1981 at ISHIBASHI MEMORIAL HALL) A) DIGITAL 録音 B) 76cm/sec アナログ録音

制作にあたって

日頃は、第一家庭電器を御愛顧いただきまして、誠にありがとうございます。

昭和50年11月にDOR-0001「プロフェッショナル・ヒアリング・テストレコード」を発表して以来、6年、今回は、100番目のアルバムをお届けすることができるようになりました。

これも偏に、会員の皆様の御支援の賜と深くお礼申し上げます。

さて、この記念すべきアルバムに、去る8月に初来日した、DDR(ドイツ民主共和国)国立ライプツィヒ放送吹奏楽団を、日本初録音するという栄誉を担うことができました。

ライプツィヒ放送吹奏楽団は、ドイツの吹奏楽の伝統を、受けつぎ、その演奏水準の高さは、ヨーロッパでも、日本でもお馴染みのフランスのギャルド・レプブリケーズ吹奏楽団と1、2を争うといわれているそうです。

このところ、日本でも吹奏楽を愛好する人達が増え、小学生から既にクラスに親しんでいるようです。

そこで、今回は、誰でも知っている楽しい音楽を、吹奏楽で演奏してもらおうべく、DDRで発売されている、ライプツィヒ放送吹奏楽団の何枚かのレコードと、来日公演のプログラムを中心に、来日以前にDAMの希望曲を伝えました。

8月14日、来日したその夜、早速、指揮者のクラウス・ビーゼ氏や吹奏

楽団の責任者の方々と、レコーディングの打合せをしたのですが、その際、「自分達の全てを聴いた上で、選曲して欲しい」という、レコーディングに賭ける真剣さと、ドイツ人気質に、さすが本場のプロ根性と感心させられた次第です。

そんなわけで、8月16日、超満員の岡崎市民会館で、来日初公演を聴き、翌日、東芝EMI、第1スタジオで、その他のレパートリーを演奏してもらい、レコーディングの曲を決定いたしました。

なお、ファンファーレについては、特にDAMのために新たに作曲をしていただき、このアルバムに花を添えております。

レコーディングにあたっては、ヨーロッパの吹奏楽の響きを生かすため、前回と同じ、石橋メモリアル・ホールを使用し、又、今話題のデジタル録音を中心に、アナログ録音も同時に行うということに決定。

8月27日、レコーディング当日は、午後1時より、演奏がスタートしたのですが、13曲強というかなりハードな収録スケジュールの上に、言葉も習慣も異なるという厳しい条件の中で、ライプツィヒ放送吹奏楽団と、レコーディング・スタッフの熱意と協力で、午後9時には、ほぼパーフェクトにレコーディングをすることができました。

全ての曲が、デジタルとアナログ(%)チャンネル)で同時に録音されたわけですが、2つの方式には微妙に音の差異があるので、それぞれの曲について、

よりふさわしいと思われる方式で、1面はデジタル、2面はアナログにふりわけてあります。

1面の「剣の舞」「ギャロップ」に代表されるデジタル録音の驚くほどシャープな立ち上がり、テープ、ヒスの無い透明でクリアかつ広大なDレンジ。

2面アナログ録音の、ふくまかで暖かみのある心地良いサウンドは、デジタル、アナログそれぞれの録音方式の特徴をはっきりと表わしているようで、大変興味深いものといえましょう。

来たるべき、デジタル時代に先がけてDAMの贈る、デジタルVSアナログの第3弾を、じっくりとお楽しみください。

なお、本アルバム制作にあたり、DDR音楽公団輸出部長カール博士、ベルリン放送局チーフ・ディレクターのレーマン氏、指揮者のクラウス・ビーゼ氏、並びにライプツィヒ放送吹奏楽団の皆様、そして招聘元のジャパン・アーツ、東芝EMI株他関係各位に多大な御協力をいただいたことを、ここに厚くお礼申し上げます。

最後に、本アルバムが会員の皆様のお聴き盤として末長くご利用いただければ幸いです。

DAMといたしましても、更に皆様に満足していただけるようなソフトの開発に鋭意努力いたしますので、今後とも、かわらぬ御支援御愛顧のほど、お願い申し上げます。

DAM推進委員会



台東区東上野に東独国家を見た

真庭 健

ライプツィヒ放送吹奏楽団レコーディングに立合って

東ドイツあ失礼ドイツ民主共和国のプラス・バンドを録音するから解説を——と頼まれて、ジョージキ、困ってしまった。西ドイツなら結構いろいろなイメージもある、資料も手に入る。ところがドイツ民主共和国、音楽事情も西ほどに伝わってこないそれにレコードも日本発売がない、しかもエージェントからの資料を見れば、なにやら一風変わったレパトリーが載って、ドイツのマーチの金字塔タイク作曲《旧友》なんて見あたらない。うー困った大変だと思っていると「27日石橋メモリアル・ホールで録音しますから立合ってください。そのほうが書きやすいだろうし」とウムを言わせぬ電話。しめた！これぞどうしようかと思っている時の神の手、少しでも資料確認に「ハイ」トーンを上げ返事をし自分でジカに確認するのいいだろうと考へて出発。上野——上野公園、動物園、西郷サン銅像、なつっこも厚かましくたむろする鳩の大群、上野駅を圍繞するそれら風物詩が、なんつーか下町風雰囲気。

しかし文化会館、美術館、芸大、なんと雑居入り乱れ。《上野学園 石橋メモリアル・ホール》は、上野駅と鶯谷駅の中間、上野を降りて駅前の雑踏を抜けて昭和通り方面北千住に向い真すく足早で15分よく見ないと通り過ぎてしまう程目立たない場所を右に曲ると回りは小粋さが漂う、シモタ屋風のたたずまいがちらほらと、路地はヤツデが茂り、打ち水の風情これが下町の代表格の上野だ。気付くと通り過ぎ信号を戻る、よく見ると突如、白壁の殿堂《上野学園 石橋メモリアル・ホール》が出現するのだ。早い話学校の講堂ですが、そこはそれ音楽学校のとなれば、卒業式にもなり弁論大会もやり文化祭の英語劇《ヴェニス商人》もやり隅には跳び箱がありマットあり、なんて講堂とは、全然違う。中に入れば瞳目する贅沢さ。正面には金色に輝くパイプ・オルガンが神々しくも鎮座ましまして、高い天井は豊かな残響を誇り、演奏会用ホールとして評判高いものなのだ。

ロビーを抜け客席の扉を開けますと、ブワッと音が、音が……。もう始まっておりました《ワシントン・ポスト》。舞台にあがった30人を超えるメンバー、顔をまっかんにして吹きまくっています。結構色とりどりのシャツを着て、ドイツ民主共和国といってもふつーのガインジみたい。客席はというと、「関係者」みたいな人が約10人といったところか、バラバラと散開して座っている。

曲が終わると、拍手は、ありません。当然なのね、録音中なので残響が消えるまで、みんな息をひそめて待つ。エコーが消えて、プレイヤー・客席一同、ホワッと一瞬つろぎますが、まだ半分緊張感が漂う。まるで試験結果の発表を待っているカンジ。そこにどこぞ天の高みから、「ハイ、どーもー（モゴモゴ）…。マイクのセッティング、変えますからー、30分ほどー、キューキーしまーすーモゴモゴ」と聴こえてきた。えらく聴き取りにくいので、これ実は、録音機材を運

び込んだ調整室からの指示。調整室のマイクを通じてプロデューサーが喋っているのだろうけれど、客席側に置かれたスピーカーがよくないのか、残響の多さも相乗して、なにやら《玉音放送》みたいなのです。やってくるドイツ人にすりゃ、そのモゴモゴぶりに加えてチンパンカンパンの日本語ですから、もう畏れ入って雲上人のミコトノリを拝聴してる。舞台わきにひかえたマネージメントのヒト、やおら立ちあがり、玉音を訳して指揮者に伝えます。「ヤーノヤーノカントカレン、カントカヒト、ヤー」と答える。メンバーも了解したみたい、ホッとして伸びをしたり、立ちあがったり。急いで舞台ソデから客席へ降り、下腹部をいたわりつつ小走りにロビーにむかうオッサンは、きつとWCでしょうか。彼と入れ替るように舞台にあがった録音スタッフ3、4人、マイク・スタンドにとびついで、《セッティング変更》が始まったのでした。

調整室は？と行ってみました。ガラとしたホールとは違って変り、20畳ほどの部屋、中央に調整卓、右にアナログ用レコーダー、左にデジタル・レコーダー、右奥にコーヒーマーカーが置かれ、それぞれの前には2、3人ずつのオペレーター。調整卓後ろの小机には譜面を掲げて見入っている（例の「玉音」の）プロデューサー。ほかに、いかにも管理職フーの人やクライアント・フーの人、アーティスト・マネージメントフーの人、正体不明フーの人等々いろいろと、床には太いケーブルがゴニョゴニョとぐろを巻いて、活気と熱気があふれている。調整卓の正面には舞台の様子を見るための、小さなケーブルTV。ガラとした舞台ではスタッフがマイク・スタンドをいじっています。

その間を利用して、ミキサーの方に話をうかがいました。今回の録音にそなえ、このバンドのレコードやコンサートを聴いてまわったとのこと。で、録音素材としての音の質は判る、このホールの響きもよく使っている、となればマイクはこれを使いセッティングはこうして、なんて写真が出来るわけです。きょうは朝から機材を搬入、プラン通りにセットした。午後になりメンバーが集まって、そこでバランス・テストに1曲（さっきのワシントン…がそれだった）やってみたら。そうしたらマイクを通して入ってきた音は「一瞬頭ん中がクワッとなるくらい」残響のまわり込んだどうしようもない音だったとのこと。そこで急拠、セッティング変更となった次第。実はこの日夜遅く、全てが終了しての打ち上げで一杯入ったミキサー氏、「ああいったことがおこるから録音では奥が深く面白んだよね」と、仕事を仕上げた満足げな顔でしたが、この時はそんなユトリなぞどこへやら、ひきつった顔で語ったのでした。

30分ほどで変更作業を終え、いよいよ本番開始。こうなると早い。1曲をまず通して演奏。終わると例の玉音放送。「ハイ、れんしゅ一番号6の一、アタマから一、1、2、3、4、5小節の一、アインザッツがモゴってなかったよーです。もう一度頼いまーす」

通訳。「ヤーヤー」と指揮者。で、そこところ気をつけてもう一度——という具合に進みます。

あれは4時頃だったでしょうか、小休止ということ、20分程度休憩をとりました。ロビーに出てきたバンド・メンバー達にマネージメント側からオヤツが配られた。みかん、バナナ、桃、お茶、ジュース、レモンティーところが彼ら違った、皆小学生と同じく順番に並んで自分の番を待つ（日本人の大人達にはない感じ）。

指揮者クラウス・ヴィーゼ氏からききたこと

この前日（8月26日）で46歳の誕生日をむかえたとのこと。若々しくキビキビした身のこなしは、音楽家というより、プロ・スポーツ選手ふう。1953～58年、ハレとライブツィヒの音楽大学でトランペットと指揮を学ぶ。ライブツィヒでの指揮の先生はハインツ・レーグナーだった。レーグナーなら日本でもレコードを通じておなじみですね。

現在はライブツィヒ放送交響楽団常任指揮者であり、ブラームスなぞもレコーディング済み。ただ、けしてクラシックにこだわらず、ミュージカル、バレエ、オペレッタからポップスまで手かけ、ライブツィヒ放送ポップス・オーケストラや吹奏楽団もよく指揮する。その関係で今回の同楽団訪日にも同行した。ドイツでの録音もよく行なうが、大体、今回と同じようなやり方である。ただ、今日のハード・スケジュールには疲れたよ（と笑う）。「食べ物は何？」「スキヤキ、テンビュウラ。あと魚貝類がうまかった。ミソ汁もイケた」とのことでした。

紙コップを持ち自分達でお茶を入れる、そしてオヤツを1つもらうまでで学校の給食、バンドのメンバー全員に渡ったのが約20分それから10分休憩、予定曲全部録音出来るのか不安がチラッ——午後6時頃ホール地下食堂でメンバーと一緒に晩メシをとり厚く堅いチキンカツをハシで食べながら（メンバーはナイフとフォーク）食後のクツロギのひとつをねらって独占体あたり完全取材インタビューを敢行したのでした。



コンサート・マスター、シュールマン氏及び放送局ディレクター、レーマン氏からさぐりだしたこと

2人はまるで兄弟のようだ。シュールマン氏に質問してもレーマン氏が答え、レーマン氏にきけばシュールマン氏が口をはさむ、といった具合。常任指揮者を置かないこの楽団にとって、コンサート・マスター（クラリネット）は《常任》に近い役割を果たしているのだから。局のディレクターは、このバンドが放送局所属ということから、メンバー達の上司といったところか。彼ら2人がかわるがわる答える

ことによれば、ライブツィヒ放送吹奏楽団は1950年に設立された。放送番組での演奏を主目的にするため、レパトリーはベートーヴェンから流行歌まで、極めて広い。もう五線譜に書かれていればなんでも吹いちゃうカンジ。ただ「今回のレパトリーにある種有名ドイツ行進曲があまり無いようだが？」の質問には、ある特定の曲は歴史の中でファシズム（ナチスのことですね）と結びついてしまっている、そういうものはやらない——と厳粛なお答えをいただいた。

フル・メンバーは32名（Trp.5, Trb.4, Hr.4, Ten. Hr.1, Bar. Hr.1, Tuba 2, Cl.6, Fl.2, Ob.1, Fag.1, Perc.2, CB.1), Flug. Hr.2、全員で演奏する機会は3回/月程度。普段は小さくわかれて活動している。またライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団とは親密な関係があり、エキストラ・メンバーとして頻りに往き来があるという。

放送局のバンドだからドラマや歌の伴奏はもちろんのこと、公開録音、職場訪問演奏、お祭りの野外演奏など、活動の場所もとどまることを知らない。

「日本の聴衆の反応は敏感だし、とても暖かくてうれしかった」と、ほんとうに嬉しそうに語ってくれた彼らは、日本の曲も一杯持ち帰ってレパトリーにしたい——とも述べていた。公共放送所属のバンドという性格もあるだろう、とにかく音楽は愉しむためにあるという基本に立ち、明るく伸びやかなサウンドを満喫させてくれた彼ら。東ドイツの電波に《赤とんぼ》の流れる日は近いのだ。



コンサート・マスター：シュールマン氏



ディレクター：レーマン氏



曲目解説

SIDE 1-1 剣の舞

ソヴィエトの作曲家アラム ハチャトゥリアン(1903~1978)の作曲によるバレエ音楽の一場面。禍い転じて福と成し、主役男女が結ばれる大詰の結婚式。2人を祝ってソヴィエト各地の民族色豊かな踊りが踊られるが、その中のひとつがこれ。黒海に近いクルド族の出陣の踊り。勇壮な中にもアルメニア人ハチャトゥリアンならではの東洋的な色彩が感じられる。1942年作。

SIDE 1-2 道化師よりギャロップ

同じくソヴィエトの作曲家ドミトリ・カバレフスキー(1904~)が1938年に書いた子供のための劇音楽中の1曲。ドサ廻りの喜劇一座をテーマにした劇だが、音楽は逆に「土の香り」派ハチャトゥリアンより、数倍都会的なセンスを持っている。木琴ソロが聴きものの。

SIDE 1-3 ムシデン(別れ)

スイスに近い南ドイツ・シュヴァーベン地方の民謡であり、恋人との別れを歌っても、明るく軽快だ。題の「ムシデンMuss i denn」は曲冒頭の歌詞であり、「私は* *しななければならぬ」という構文。

この演奏、録音の際に調整室で聴いていたが、かろやかぶりを楽しんでいるうちに、アツという間という感じで終わってしまった。関係者一同「もう少し長ければもっと愉しめるのに…」と意見がまとまり、例の玉音でもって「リピートするなりして、もうちょっと長く…」と頼んだところ、「この曲は民謡であり、歌詞はこれだけしかないので、繰り返す必要はない」と断わられてしまった。レコードでもアツという間に終わってしまう、束の間愉しみだ。

SIDE 1-4 口笛天国

文字通り口笛アリ手拍子アリかけ声アリで、ライブツィヒのメンバーもノリのいいところを聴かせてくれる。前出シュールマン氏にいわせれば、「自然の中、森の小径を散歩する、あの気分だよ」とのこと。ドイツの森とくれば「黒い森」がガマリだけど、それにしちゃやけに明るい曲だなーと思っていると「Greenaway-Cookeは英国の作曲家なんだ」と言う。なんだ、それじゃ《クマのプーさん》のあの森なのだ。

SIDE 1-5 陽気な若者

中間部にテンポを落としたトリオを持つ、軽快なポルカ。4本のトランペットをフィーチャリングして楽しい。作曲者ハンス・スティルプは(シュール氏によれば)「西独現代の高名な作曲家」とのことだが…。

SIDE 1-6 赤とんぼ

御存知、日本洋楽界の父・山田耕筰(1886~1965)の名曲。尚、曲の歌詞(三木露風)中、「オフレ〜テミタノオワア」の「オフレ」を「追われ」と思いこみ、(子供たちに追いまわされる赤とんぼのつらい心境を歌っているのだな)と解釈し同情していたが、近年、「負われ」ということを知った。曲はクラウド・ヴィーゼの編曲によるが、日本の秋の夕暮れといった抒情からは遠く、ヴィヴァルトの効いたトランペットなど明るく美しい。

SIDE 2-1 DAMのファンファーレ

「ファンファーレ」を岩波国語辞典でひけば「太鼓・トランペットなどを用いた、はなやかに勇ましい、短い楽曲」とあるが、まさにこれぞファンファーレといった感じの壮麗な曲。作曲者クリストフ・ライヒェルトはなにをかくそう、このバンド・メンバーの1人(トランペット)。「何かファンファーレみたいなのも1曲欲しいなあ」とのディレクターの言葉に、「じゃ作曲してあげるよ」とこつ返事。滞在中のホテルの一室で出来あがった新作だ。つまり世界初演 初録音というわけ。

SIDE 2-2 「軽騎兵」序曲

オーストリアの作曲家フランツ・フォン・スッペ(1819~1885)が、1866年につくった喜歌劇(つまりミュージカルね)中の序曲。金管の前奏に続いて、馬の駆けるようなギャロップの主部。少し愁いを帯びた中間部をさきで、再びギャロップがにぎやかに戻ってくる。本来管弦楽の作品だが、オーケストラの響きにひけをとらない厚みを出した演奏だ。

SIDE 2-3 ラデツキー行進曲

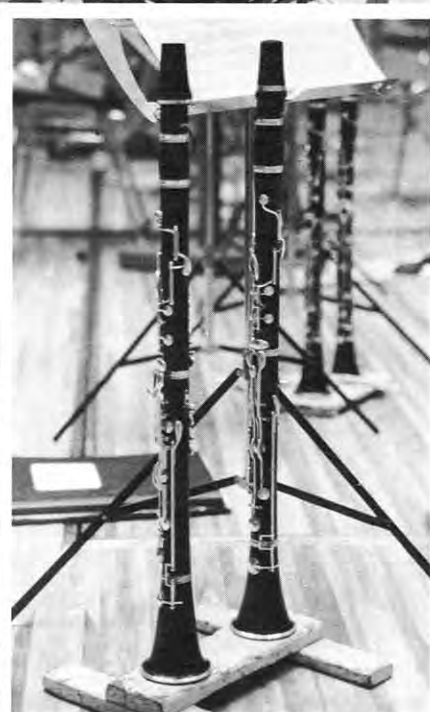
2人いるヨハン・シュトラウス(親子なのです)の、こちらは父(オーストリア1804~1849)の作品。Jr.の作品が数多く今日でも親しまれているのに比べ、父のカゲは薄く、「アンネン・ホルカ」等数曲に名を留めている。イタリアを征服した勇将ラデツキーを讃えた愛国行進曲。1848年の作品。

SIDE 2-4 ハイデックスブルク万歳

「作曲のヘルツァーはもうとつくに死んだが、とにかく今世紀の作曲家であることは確かだ。プロイセン的なドイツ・マーチをたくさん作った。このハイデックス城というのはチューリングゲン地方にある小さな古城のひとつでね。曲は入場行進なんかによく使われるんだ」とはシュールマン氏の言葉だ。

SIDE 2-5 ワシントン・ポスト

「行進曲の王」ジョン・フィリップ・スーザ(1854~1932)の代表作。スーザは当初ヴァイオリニストだったが、ひょんなことからアメリカ海軍楽隊の楽長に任ぜられ、以来吹奏楽の魅力にとりつかれ数々の名曲を作る。軍楽隊退任後も《スーザ・バンド》を組織して活躍した。曲は1889年、新聞社の式典のため作曲された。





録音に立合って

東芝EMI録音課 池田 彰

■ワンポイント録音について

前作「ミッシェル%」(DOR-0092)に引き続き、私の出番になってしまった。今回もワンポイント録音を行いたいとの希望をDAM側が賛成してくれたため、新たにPCMを加え、PCM主体にアナログを同時に回わして取ることにした。前作でも書いたように、ワンポイント録音の特徴は自然な音の定位、距離感、奥行き、楽器の音色のニュアンスが得られるとともにホールの特徴が現われるからである。マルチ録音、スタジオ録音では、確かに楽器一つ一つは判断できるが、総べて楽器が平面に並んだに過ぎない状態となることが多い。演奏会場に響き合った楽音の豊かさ、それ以上に広がる倍音の世界がない、乾燥した音の集合体になってしまう危険性が多いので、ある意味では、マルチ録音では不可能な表現さえある。しかしながらこれらは総べて音楽が演奏会場と、演奏者、音楽の種類が一致したという前提がなければならないのである。ホール選択にも経験のない所ではいけないし、勿論良い響きでなければならない。演奏者も演奏経験のある会場が望ましいが、今回は初来日ということでその点が不安であった。個々の楽器のバランスについては、指揮者と演奏者任せのため負担が大きいとか、録音する側はその音楽を完全に把握、熟知し適切な助言をあたえ、マルチ録音では編集作業に於いて補えるが、これも現場でクリアーしておかなければならず、大変重労働であるが、それ以上の効果を得る部分が多いということでワンポイント録音にしたのである。

■録音を担当して

DDR(ドイツ民主共和国)国立ライブツィヒ放送吹奏楽団は、レコードを借用して聴いた以外には私の知識にはなかった。けれどレコードは現代曲とポルカとワルツばかりで、私としては把握するだけの材料ではなかった。8月16日の岡崎市民会館で最初の演奏を聴いて、私の録音方法と音のイメージが出来上がった。レコードのイメージは私の感覚から言えば、マルチマイクで、音の伸び、広がりもなく、スタジオ録音の欠点が気になって

いたからである。しかしながら演奏のリズム感、アンサンブルはそれを理解するには充分であったとも云える。その時にワンポイント録音を決定していた。又、実際の演奏会場で感じた楽器の音色はレコードの傾向にも現われていたように、いわゆるドイツ的、重厚なアンサンブルと云うのではなく、トランペットの音色に代表する明るいアンサンブルであった。木管の音色でも、フルートは息の音ばかりする掠れた音色ではなく、まろく、オーボエは、繊細、つややかな、クラリネットは全体の響きの中に溶け込んでいた。しかしパーカッションのグランカッサとティンパニが、その使用されている楽器の特質から、不満足を覚えざるを得なかった。録音時には、少なくとも大きなグランカッサを用意することを主張した。又、いわゆるクラシック音楽と云われる音楽よりも自分達の身近にある音楽をどれ程楽しく演奏していたか、ワルツ、ポルカ等、彼等の生活に密着した音楽であるか認識、確認させられた。例えばこのレコードの中の「口笛天国」「陽気な若者」に見られるような、音楽本来の楽しみを彼等は示してくれた。それは云うまでもなく、国民性、地域性であり、音楽の生れた土壌であり、歴史である。

さて8月27日の石橋メモリアル・ホールで録音する場において。私はプラスの音量とホールの残響時間の長さ、容積が不安であったが、すぐれた演奏団体であることに確信を持つことができ、私の経験から私の範疇にあると自信がもてた。

朝、十分な点検とセッティングを終了して、吹奏楽団が入ることを待つだけの余裕と準備ができていたが、実際はメイン・マイクの選択に大きな間違いをしていたことを、テストの段階で認識させられ、私のイメージを崩壊させられてしまった。それは明るい音色のアンサンブルである吹奏楽団であることから、私の選択したメイン・マイクがAKG(オーストリア製)であったことが、音楽がモニタースピーカーから流れてくる音色、音質を聞いて、私の発想が逆であることを反省させられたのである。私は大きな変革を要求され、私自身で迷

うことなく、私の常に使用しているノイマン(ドイツ製)M-269を使用した。確かにその変化と音楽的イメージは一新し、私が演奏会で感じたものに近づいていった。この間15分であつたらうか。テスト録音したデジタルのプレイバックを吹奏楽団に聴かせながら、私自身のバランスと音色の検討をしていた。確かにチューバが弱い、そのことを指摘され補助マイクを新たに増設した。ワンポイント録音とはいへども、それ以前にパーカッションのグランカッサ、ティンパニ、シロフォン、ドラムスにはダイナミック・マイクがそれぞれ使用されていた。残念なことに私の欲求した、私達の用意したもの(低音が豊かで大きなもの)は結局使用されずに、彼等の持参したもので録音は終了してしまつた。それは演奏上の都合で、残念であるがしかたのないことであつた。パーカッションの奏者が2名いるのだが、彼等の演奏する内容は4名に匹敵する責務を負わされているだけに、楽器を変えることは困難であつた。

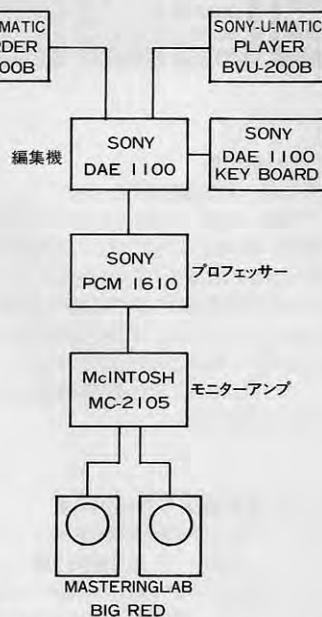
ここでライブツィヒ放送吹奏楽団の楽器編成を紹介せねばならない。トランペット—5、フルーゲルホルン—2、フレンチホルン—4、フルート—2、クラリネット—6、トロンボーン—4、バスーン(ファゴット)—1、テノールホルン—1、バリトンホルン—1、チューバ—2、オーボエ—1、打楽器—2、コントラバス—1(計32名)

さてメイン・マイクを決定し、パーカッションとのバランスを感じとり、ミキサーは楽器からその音楽の姿を創造していくのであるが、そこはミキサーの本領でもあり、又恐怖でもあるのである。それはディレクターの助言はあるもののミキサー個人で判断、決定すべき問題が多いからである。しかもこのときはデジタルの2チャンネルと8チャンネルのアナログ録音であったからである。けれども8チャンネルは、私の希望で同時に回していたのである。これはモニター・スピーカーの置かれた部屋と場所によって音質が大きく変化し、その異差を感知し認識していても、人間の耳は自然と長い時間では、その人の感覚の内にもどってしまう、快い音に変化させてしまうからである。標準的モニター・スピーカーで再生したときに、その差の問題が出て来てしまうからである。デジタルで総べて完全に再現できるという自信はなかったもので、納得のゆかない曲目だけをトラックダウンした。確かに、私の音楽的バランス云々よりもデジタルとアナログの音質の差は歴然と知れるが、これはどちらが良いとも私に決定できないものであり、デジタル録音は一つ一つの楽器の明確さと、その良さは、アナログとは比較にならないものであるが、全体の響きとハーモニー、自然な広がりの方では、私の感覚の中の音楽であった。そのような意味合いからも、このA B面の選曲があると言えるのである。

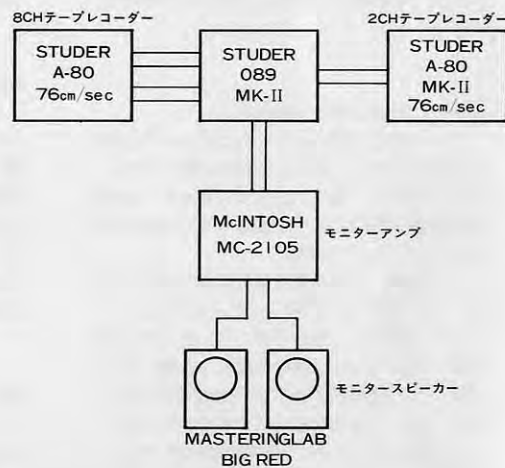
全てにデジタル録音が良いとは云えないけれど、今までの発想と異った録音方法が考えられるならば、デジタルを利用して、より良い音質の音楽を再現することができると信じている。しかし音楽は根底には楽しむことを忘れないことだと、ライブツィヒ放送吹奏楽団は示唆しているとも云える。

編集(東芝EMI#4ED S.56.9.1,5)

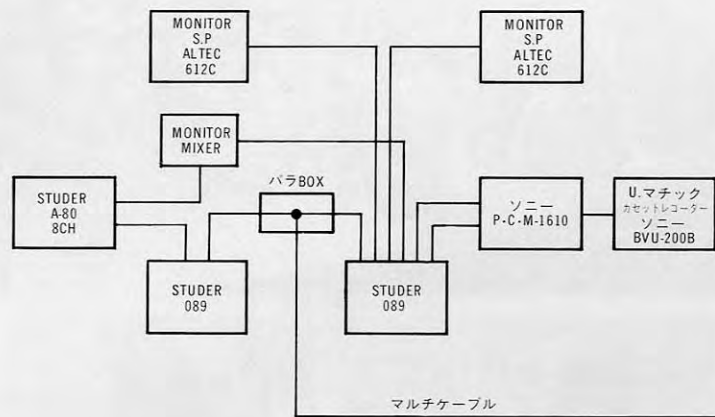
●PCMデジタル



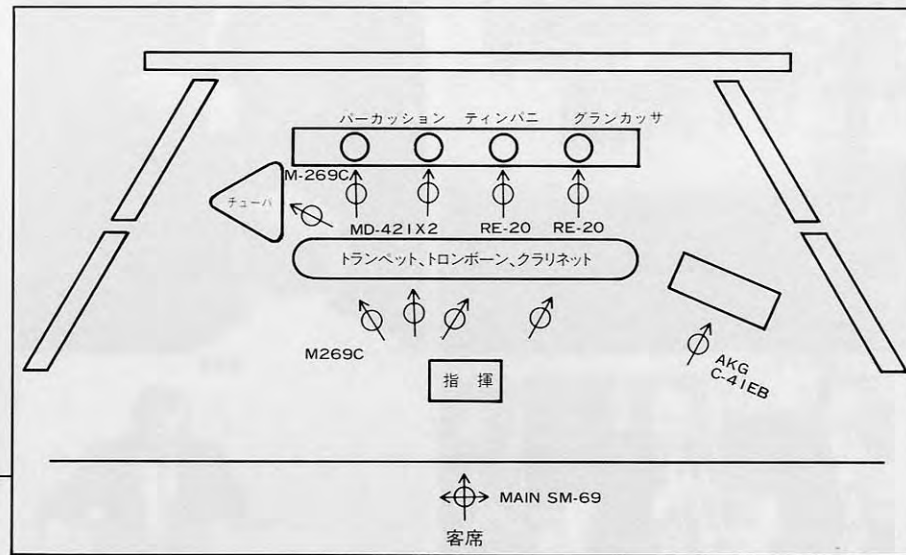
●アナログ(76cm/sec)



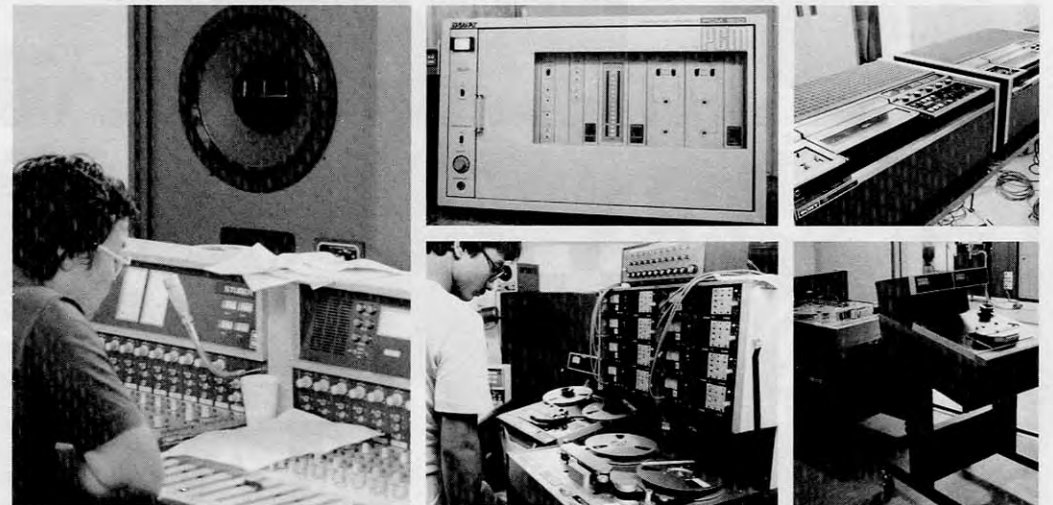
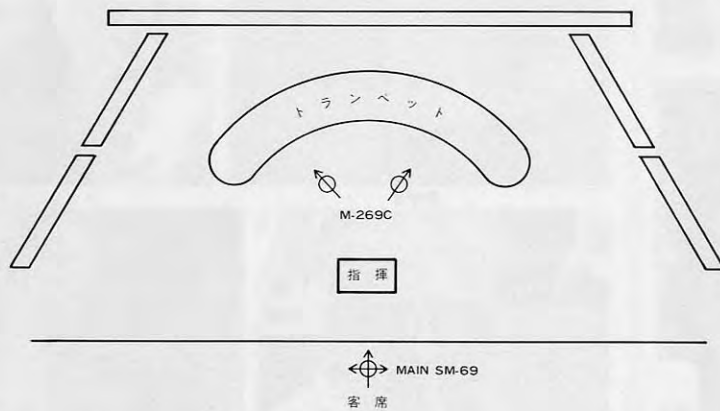
ブロック・ダイアグラム (石橋メモリアル・ホール)



オーケストラ、楽器編成、マイク・セッティング (石橋メモリアル・ホールS.56.8.27)



●DAMのファンファーレ楽器編成





ライブツィヒ演奏風景



指揮者



ライブツィヒ演奏風景



打楽器奏者



金管楽器奏者



打楽器奏者



指揮者



ファゴット奏者



ライブツィヒ演奏風景



木管楽器奏者



ホルン奏者



チューバ奏者



コントラバス奏者



クラリネット奏者



演奏風景



クラリネット奏者



リハーサル



トランペット奏者



シロホン奏者



オーボエ奏者



トロンボーン奏者



ピッコロ奏者



ホルン奏者



トロンボーン奏者



クラリネット奏者



チューバ奏者



フルート奏者

■DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩でハード、ソフト共に著しく多様化しており、PCMテープ、デジタル・オーディオ・ディスク及びビデオ・ディスク等による新しい記録媒体の開発と実用化に伴い、多種多様なソフトテクニックと音楽へのアプローチの仕方が一段とエスカレートして来ております。同様にいかにより高い音楽性とオリジナル演奏の忠実なトータル・サウンドを完成させるか、ソフト技術以上に製盤技術の開発もここにきて厳しく、高密度、高品質化の一途を辿っています。その中で特にビデオ・ディスク及びデジタル・オーディオ・ディスクの開発技術によって得られた製盤の周辺技術とノウハウを最大限に駆使し、従来のマスのプロ仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て製作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時ヘタをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ピックアップによっては、カートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

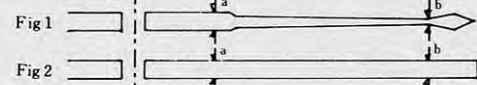


Fig 1 一般レコード a-b=0.6[mm]

Fig 2 新フラットレコード(ディスク)

a'-b'=0.2[mm]

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を共振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が十分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比	30%up
厚さ比	最厚部 15%up 最薄部 65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限にガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

■クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の「DAM45」では、

高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクオリティを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μ~280μ、[L-R]、ピーク・レベル+20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレースする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かすかすのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティのよいダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ませんが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱下さい。
- 回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33回転に比べて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。
- 再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。
- このレコードはハイレベルカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ピリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状態となっています。

再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

レコード材質——プロユース材料使用

■カッティング・データ■

Cutting: TOSHIBA-EMI. #3ED

Cutting Date: SEPT. 10. 1981

Tape Recorder: STUDER A-80

Drive Amplifier: Neumann SAL-74

Cutting Lathe: Neumann VMS-80

Quartz Rock Motor

Cutting Head: Neumann SX-74

Non Limiter

Non Equalizer

■スタッフ■

プロデューサー	小山正敏
ディレクター	中田基彦
ミクサー	池田 彰
サウンド・エンジニア	原 清介
カッティング・エンジニア	竹内昭吾
メンテナー	伊藤 勲、金子秀作
クオリティ・コントローラー	出口敏彦
フォートグラファー	堀田正實、林喜代種
デザイン	東芝EMI株デザイン室
録音場所	石橋メモリアルホールS56.8.27
協力	(株)ジャパン・アーツ
企画・制作	第一家庭電器DAM
製造	東芝EMI株式会社



Daiichi-kateidenki Audio Member's Club.
DAM

			<p>DAM オーディオ・チェック・レコード ディスコグラフィ</p>					
51年 6月	51年 6月	51年 11月				51年 11月	52年 6月	52年 6月
52年 11月	52年 11月	53年 6月	53年 6月	53年 11月	53年 11月	54年 6月	54年 6月	54年 6月
54年 11月	54年 11月	55年 6月	55年 6月	55年 11月	55年 11月	56年 6月	56年 6月	56年 6月